

ヘゲモニー闘争への帰還

ラクラウからランシエールへ

2019年6月29日ルネ研関西／斎藤

I. ラクラウ／ムフの古典的マルクス主義総括

① 第二インター期の諸論争から

☆ エルフルト綱領の原則部分と実践部分を巡る論争

- 1890年代半ば、ベルンシュタインによる修正主義論争は、下部構造決定論を否定するところから始まった（新カント派的社会観：不可知論と理想主義ヒューマニズム）が、実践的にはマッセンストライキの提起を巡る党指導部の待機主義への批判として現れる。
- 下部構造決定論と自動崩壊論が労働組合指導部の労働貴族的なイデオロギーとなる。
- 左派（ローザ）は資本主義の帝国主義段階への移行を対象化して（帝国主義論）、マッセンストライキから権力奪取を提起。＝レーニン、トロツキーの『資本論』に反する革命へ

☆ ラクラウの総括

- 問題は、下部構造の問題ではなく、《自律的な政治的介入》であった。
《経済的土台からの政治的なものの自律性が、ベルンシュタインの立論の真の新しさなのである。》91
- 改良主義と修正主義との区別。
- 中間層の拡大と農民階層の維持。資本主義の第二産業革命あるいは帝国主義段階の特徴。
- 歴史の決定論的論理を否定することで、倫理的主体の自由活动空間を広げようとした。
- 国家の内部のいる労働者階級という視点は正しかったが、「歴史的発展」という必然性という予測は根本的誤り。→ 主体の複数的アイデンティティと節合関係の可逆性。→ 「陣地（ポジション）戦」の可能性

□：ベルンシュタインの社会主義社会規定は、「消費協同組合と地方自治体による生産の管理」という構想だった。（参照：保住）

② 帝国主義論と第三インター期——ヘゲモニーの登場

☆ 古典的マルクス主義（カウツキー）の危機としての修正主義論争を総括する帝国主義論

- 「不均等発展」という概念は、一般理論と形態学という二元論に基づいている。
- ：中間層の拡大と農村の未解体は、歴史の進歩か帝国主義的傾向か。
- ロシアの永続革命論構想が、階級同盟というヘゲモニー概念を生み出す。
- レーニンの党組織論、前衛と大衆。権威主義的政治。

□ ラクラウの歴史総括に欠けている問題

- ドイツ社会民主党の古典的社會観は、社会主義者鎮圧法の弾圧下にあった党の路線であった。1890年の弾圧解除以降の相対的安定期と帝国主義への資本主義の変容が修正主義論争を生み出したと思われる。故に、現時点での総括でラクラウに欠けている問題点は、ワイマール期のファシズム台頭による党の壊滅を節合関係の可逆性一般に解消して点である。
- カウツキーがベルンシュタインを批判した論点の中に、物象化の問題がある。これについてはラクラウは全く触れていない。

II. ラクラウ／ムフの本質主義批判

① 資本主義批判（下部構造論）

- ☞ 下部構造の最終審級を否定するというラクラウの言説にとって、資本主義への批判の観点はどうなるのか。

- ☆ 《…何かが絶対的に決定されていることを確証し、それを非決定的なものから分離する明確な線を確定するためには、そこでなされている決定の特有性を確証するだけでは不十分なのであって、その必然的性質もまた主張されねばならないのである。》 127
 - ラクラウのこの論理では、社会的なものの経済的規定性は考えられていない。
- ☆ 《…理論的に決定可能な特有性はすべて、下部構造とそこから帰結する階級制の地形に帰せられてしまい、したがってそれ以外のいかなる論理も、偶然的な変動の一般的な地形のなかに消え去るか、あらゆる理論的決定を逃れる実体（意志や倫理的決断のような）に帰せられてしまうのである。》 128
 - 第二インター期における「マルクス主義の危機」は、下部構造の規定性（宿命論）から実践を如何に救い出すか、という課題に応える問題だった。→ 資本主義の帝国主義的発展がそれに応える解答を準備した。→ 「不均等発展」＝ロシアにおけるブルジョアジーの脆弱性とプロレタリアートの集中（ロシアの特異性）
- ☆ 《…一方における必然的内部（これは「正常な」発展における階級の課題に対応する）と、他方における偶然的外部（社会的行為者がなんらかの瞬間に担わざるをえないが、自らの階級の本姓とは異質な課題の集合体）との対立である。》 130
 - 西ではファシズム（人民戦線）によって、東では『資本論』に反する革命（労農同盟）によって、下部構造論は粉碎された。
- ☆ 《…自由民主的國家の危機と、ラディカルで人民的な右翼イデオロギーの出現とによって、民主的な権利および自由を本性上「ブルジョア的」だとする構想に異議が唱えられた。それと同時に、反ファシズム闘争は、社会主義的アイデンティティと潜在的には融合しうるような人民的かつ民主主義的な大衆の主体性を創出した。》 154
- ：ここから、経済的下部構造から規定される諸々の任務が、社会的な場所へ移し変えられ、民主主義的な大衆とその任務へと移行する。つまり、そこは経済的規定性を直接には受けない領域として完結しない空間となっている。
- ☆ 《発展段階のズレによって、労働者階級は大衆の地形のうえで行動することを余儀なくされる。その場合、労働者階級は、自らの階級ゲッターを放棄し、自らの範囲を超えて広がる幾重もの敵対と要求の節合者へと転換しなければならない。》 146-7
- ☆ 《経済の空間それ自体が一つの政治的空間として構造化される…》 183
 - だから、労働力商品規定は虚構。
- ☆ 《かくして、労働過程の展開を決定するのは純粋な資本の論理ではない。労働過程は、単に資本が支配を行使する場所ではなく、闘争の場なのである。》 188

② 弁証法

- ☞ ヘーゲルはポスト啓蒙主義。《彼にとって、アイデンティティは…移行、関係、差異として構成》→ 曖昧な領域が、マルクスにおいて弁証法概念の矛盾した使用となった。→ 固定化の論理を回避するものとしての弁証法（つまりそれが節合）。
 - ☆ 《社会的なものそれ自体がいかなる本質ももたない》 222
 - 《たとえば、毛沢東の絵画的な弁証法の考え、彼は、弁証法的移行の論理的性質について無理解であったからこそ、節合の論理を弁証法と偽って、政治的-言説的水準に導入することができた。》 221
 - ☞ アルチュセールの「重層的決定」という規定は、《新しい節合概念》の可能性があったが、彼はそれを放棄したという。《経済による最終審級》を手放さなかったから。
- 《…「矛盾」は、矛盾がその中で作用する社会全体の構造から切り離すことができず、また存在の形式的な諸条件、およびそれが支配する諸審級からも切り離すことができない。したがって矛盾それ

自体は、その核心においては、それらによって影響され、同じ一つの運動の中で、決定するものであると同時に決定されるものであり、それが活動力を与える社会構成体の様々な水準と様々な審級によって決定されるものである。それゆえ、われわれは矛盾は、原理的に言って重層的に決定されるということができる。》(『矛盾と重層的決定--探求のためのノート』164-5)

ロ：ラクラウはアルチュセールから多くを継承している。『矛盾と重層的決定』では、レーニンの革命を「例外の規則化」として論じているし、同じテーマを論じている。ここから、ラクラウが継承している古典的マルクス主義批判は欧州の階級闘争（19世紀末から20世紀前半期）全体から学んでいると思われる。これは、日本の新左翼の総括がスターリン主義批判から出発したことと比して特徴的。

㊦ 経済の最終審級を認めると、あらゆる特定のタイプの経済と関わりがなくなり、抽象的な普遍性だけが残る。歴史的な変動（例えばロシア的特異性など）が様々な例外の規則化として重層的に決定されるとしたら、最終審級としての抽象的な普遍性から規定されることと矛盾する。

☆ 《アルチュセールの合理的なパラダイムにおけるさまざまな契機のあいだの論理的な結びつきを断ち切る試みは、バリバルの自己批判によって開始され、英国マルクス主義のいくつかの動向において最終的な帰結にいたった。》230 → ヒンデス、ハースト、カトラー『資本論と現代資本主義』 → アルチュセールはその後再生産論で、イデオロギー装置論へ向かう。

③ 敵対

㊦ 現実的対立 (A-B) と論理的矛盾 (A-非 A)。敵対はそのどれでもない。

☆ 《敵対の場合は、…「他者」の現前は、私が全面的に私自身であることを妨げるのだ。そこでの関係は、両者の完全な全体性から派生するのではなく、それらの全体性の構成の不可能性から派生する。》280

☆ 《敵対はあらゆる客観性の限界を構成し、部分的かつ不安定な客観化として開示される。仮に言語が差異のシステムであるとするならば、敵対は差異の失敗にほかならない。そうした意味で、敵対は言語の限界の内部にみずからを位置付けているのであり、言語の分裂としてのみ、すなわち、メタファーとしてのみ存在可能である。》281

㊦ 社会が完全に閉じられたもの、行為主体の集合体と同じものとするなら、敵対は生まれない。つまり、これはランシエールの言う「存在しないもの」「不和」あるいは「分け前なき人」と言う言葉で言われているものだ。

Ⅲ. ラクラウ／ムフの戦術論（政治哲学）

① 用語

㊦ 言説 (discourse) : 節合的实践の構造的全体性。異なる位置が節合される。→ フーコーの「言説形成体」と近似？。

節合 (articulation) : アイデンティティの変更。

契機 (moment) : 言説の内部の異なる位置

要素 (element) : 節合されていない差異

結節点 : 部分的な固定化の特権的な言説的地点

▷ 等価性の論理 = 単純化の論理

▷ 差異の論理 = 政治的空間の拡張と複雑性の論理

▷ 人民的主体位置 : 二つの敵対する陣営への分割

② 民主主義闘争

- ㊦ フランス革命によって開始された民主主義の革命は、これまで、それらが資本主義的近代の産物であるとされていたが、ラクラウにとっては下部構造の規定性がない以上、そういう認識にはならない（おそらく）。民主主義の革命とは敵対と等価性によって生まれる不定形なものかである。
- ㊦ 民主主義における敵対は、社会の差異システムとして構成された政治空間の中に現れた等価性の穴のようなものであり、それらを言説による節合（戦略）によって差異が表すさまざまなアイデンティティを変容させることで、二つの敵対する陣営へと、つまり人民を立ち上げるという政治がヘゲモニー戦略なのである。
- ☆ 《英国における白人労働者の階級的な政治的主体性は、状況に応じて、人種差別的な態度や反人種差別的な態度によって重層決定されている。こうした事態は、移民労働者の闘争にとっては明らかに重要な問題である。これは労働組合運動のいくつかの実践に影響を与え、また労働組合の実践の方が、国家政策の数多くの局面にそれなりの結果をもたらす。そして最終的にはこれは、移民労働者自身の政治的アイデンティティへと跳ね返るのである。ここには明確に、ヘゲモニー闘争が存在している。というのも、白人労働組合の戦闘性と、彼らの人種差別主義あるいは反差別主義との節合は、当初から規定されていたものではないからである。そうではなくて、反人種差別運動によって担われる白人労働者の闘争の諸形態は、いくつかの活動や組織的形態の自律性を部分的には経由することになるであろう。それは、部分的には他の諸勢力との同盟体制を通じて、また部分的には諸種の異なる運動の内実のあいだでの等価システムの構築を通じて実現していくであろう。というのは、反人種差別闘争、反セクシズム闘争、反資本主義闘争は、そのまま放置されたならば、必ずしも結合することはないが、それらの内実のあいだに安定した重層的決定の形態が構築されるならば、もっとも強固な反人種差別闘争が確立するからである。》 312-3
- ㊦ これらのヘゲモニー戦略は、のちの著書において、「空虚なシニフィアン」という言葉に置き換わっていく。
- ☆ 《極めて不均質な社会的諸要求を包含するためには、自分自身の個別的な諸要求を払拭しなければならないからである。つまり、こうである。人民アイデンティティは、傾向において空虚なシニフィアンとして機能する。》（『ポピュリズムの理性』 135-6）
- ここでのラクラウの「人民」の概念は、市民でも国民でもなく、ましてや労働者でもない。社会の敵対的諸要求を糾合して一つの「名」にまとめ上げたものであり、内容はないのである。このような無内容な呼びかけこそ、逆に様々な諸要求がそこに自らの姿を見いだすことで運動が構築されていくと言うのである。

IV. ラクラウから学ぶ

① マルクス主義の下部-上部構造論への批判

『経済学批判』の序文に書かれているマルクスの規定を全体として否定する。それは先にも書いたが、経済的事象そのものが政治的なもの（上部構造／イデオロギー）を規定するのではなく、経済的事象それ自体が政治的な現象なのだ、と言う。故に、歴史的な労働者階級の役割も社会主義の歴史的必然性も否定されるが、労働者階級の民主主義的任務は維持されている。

この論議は、修正主義論争がその元祖にある。20世紀の階級闘争の歴史を総括すると、世紀前半においてファシズムに敗北し、ロシアで革命が成就したことで、古典的マルクス主義全体が疑われた。アルチュセールがエンゲルスの弁証法を批判して、「重層的決定」を唱え始めたことで、下部構造の規定性が緩められ、主体の問題が論議の対象となり、必然的に下部構造全体が疑いの目で見られるようになったと思われる。この経過は、スターリン主義批判として始まった日本の新左翼の歴史と大きく違うように思われる。（また、戦後主体性論争も近代的自我の確立を巡る問題に傾斜し、階級的主体の

問題としては論議されなかった。)

しかし、人間社会の自然的物質的な生活が意識（イデオロギー）に何ら影響しないということはいえない。物質が意識を規定することは自明である。また、意識が物質を変革することも明らかである。この相互規定性を古典的マルクス主義が捉えきれなかったという歴史的事実はある。現在では、この古典的マルクス主義への批判は当然のごとく受け入れられていると思われる。ラクラウが独特なのは、このアルチュセールの重層的決定という水準から、下部構造の否定へ踏み出したことにある。逆にそのことで、物質的規定性の領域を政治的に変革可能だと空想的に言える可能性があるが、それ自体もまた言説形成体として相対化することで、政治哲学へ還元してしまえるという理論構成になっている。

近代経済学でさえ、物質的規定性（経済的利益誘導）というアイデンティティに固執して、袋小路に突き当たり、現在では行動経済学的な修正を模索している。このことから、危機にあるマルクス主義がフロイトやラカンといった心理学や言語理論を取り込んで物質と意識の相互世界を解剖しようとする自体は自然な成り行きだが、下部構造全体をヘゲモニー理論へ還元するというラクラウの説明には無理も伴っている。この強引とも思える否定性は、70年代以降のヨーロッパの理論論争が介在していることは確かで、今後の研究課題としていきたい。

② 「新しい社会運動」の衝撃

「新しい社会運動」という呼称は、1970年代以降に現れた様々な社会的要求、権利運動に名付けられたものである。その特徴や領域はそれぞれの運動の立場から多様に規定されてきた。欧州では、68年革命がもたらした衝撃によって、これらの運動が派生したという言説が一般的であるようだ。アルチュセール学派がこれによって分解したことは有名である。

まず、歴史的に見ると、二つの既成の運動理論が行き詰まっていたということが前提にある。一つは、19世紀以来の自由・民主主義運動、いわゆるリベラル・デモクラシーと呼ばれる社会運動である。このリベラリズムが最も高揚したのは、おそらく反ファシズム運動においてである。全体主義への抵抗理論としての大西洋憲章とその後の国際連合結成に至る過程で生まれた「リベラリズム」は、ニューディールと歩調を合わせて、自由・平等を旗印に一時代を席卷した。その意味で、日本国憲法がまさにその過程で生まれたということは日本の戦後政治に深い楔を打ち込んだものであった。

しかし、その後の冷戦期においてアメリカのマッカーシズム、あるいはトルーマン・ドクトリン、欧州におけるベルリンの壁の建設等に見られる反動期を経て、実はこれまでのリベラル・デモクラシーはまがい物であったという認識が広がってきた。それは、戦後の植民地独立運動あるいは民族解放闘争の激化に伴って、帝国主義本国における、いわゆる「公民権運動」として従来のリベラリズムの欠けていたピースを要求し始めた。（ラクラウ流に言えば、等価性の節合）

他方、もう一つの運動理論はマルクス主義を代表とする社会主義運動であって、これはロシア革命を経て、世界的な共産主義運動として世界中を席卷したが、欧州革命に失敗し、ファシズムの勃興によって自らの理論的な脆弱性が露呈し、反ファシズム闘争と第三世界の反植民地闘争へ合流する傾向を持ち始めた。それが中国革命の実現とスターリン批判によって理論的な二分（中ソ論争）を招いたことで、社会運動としての社会主義理論に多様性がもたらされた。

1960年代に至るまでのこれらの二つの潮流は、互いに影響し合いながら、いわゆる第三の潮流である「新しい社会運動」が生み出される下地を作り上げたと言えよう。ここで忘れてはならないのは、いわゆる、戦後の反動期に生まれた反共理論もまた、新たな装いをまとって立ち現れてきていたということである。19世紀末以来根強く欧州ブルジョアジーに支持されていた自由主義思想がハイエク、フリードマンらによる新自由主義思想として60年代末以降復活し始めるのである。

ここに、70年代以降の多様な社会運動が出揃う事になったわけであるが、いわゆる「新しい社会運動」とはこの二つの潮流と一つの反動思想の歴史的な合流点でもあったと言えるのであろう。故に、

「新しい社会運動」はおおよそ三つの歴史的な思想潮流から派生する事になったことで、従来の右対左、自由対全体、自由対平等、といった尺度を飛び越えた多様な対立軸が生まれることとなった。

さて、そこで我々はこれらの「新しい社会運動」を如何に捉えるかということが問われているわけである。これまで、これらの運動を民主主義闘争の諸形態という一括りの「ブルジョア民主主義」の諸課題として捉えられてきたが、環境問題やセクシズムを巡る運動においては、その運動主体の物質的規定性が問い直され始めた。つまり従来の階級理論では収まりきれない諸課題の登場である。ソビエト崩壊以降は、これらの諸課題に対する左派の理論的基礎づけが困難になってきている。

③ 現代革命における民主主義問題

古典的マルクス主義の歴史段階論に基づけば、民主主義闘争と社会主義闘争とは段階を異にする課題であった。しかし、ロシア革命以降、この二つの段階は一続きの境目のない過程として描かれるようになったが、従来「ブルジョア民主主義」と呼ばれていた領域が実はまだ完結していない底なしの沼だったことが明らかになりつつある。それが「新しい社会運動」として立ち現れてきたのが第二次大戦以降の資本主義社会内部であったことで、理論的基礎であった歴史理論（史的唯物論）が無効となった所以だろう。

ラクハウが指摘するように、レーニンの労農同盟のヘゲモニー政治が、農民の土地所有権という自由権とプロ独下における労働者階級の生産手段の社会主義的所有という権利との整合性のある実践を示し得なかった。スターリン的な集団化路線が歴史的に破綻したことで、現在では鄧小平の路線が唯一その歴史的实践となっている。

他方で、先進国における社会主義革命の課題で、自由権問題は解決済だとは考えられない。先進工業国のプロ独政策がブルジョアの自由権の制限だけでは完結しないことは、特に農業における小農の分散的所有を考えれば明らかだろう。つまり、現代革命の課題は民主主義をブルジョア的とプロレタリア的と区別することが困難になってきている。また、更にこの問題を複雑にしているのは、後期資本主義段階にある現在の先進工業諸国はいずれも産業構造のサービス労働化によって、いわゆる階級的意識を形成する集団的工場労働が少数となり、多様な職種の分散的で浮遊する賃金労働者層が多数を占めるに至っている。こういった下部構造の変容とともに、議会制民主主義の制度的構築によって民主主義問題は数年に一度の投票行動に矮小化されて、反資本主義的政治行動は限られた小集団による示威行動に縮減されつつある。このことは公共空間であるメディア圏においても資本の論理の下で圧倒的に制限されている状況の中で、変革主体の問題とその組織論が危機にあることは疑えない。

この状況の中で、今日日本の政治状況は議会制選挙においても、およそ半数の有権者は投票所へさえ赴かないし、地方自治においては議会そのものが成立しないところにまで至っている。これらの状況はラクハウ的に言えば、等価的な節合が存在しない差異性の緩い共同体となっている。それは政治的敵対が存在しないか、敵対を節合するヘゲモニーが存在しない状況だということだろう。ランシエールはこのような社会をコンセンサス社会と呼んでいる。寡頭支配下の現代社会の政治は、本来の政治とは程遠いものであり、管理された差異が熟議と呼ばれる出来レースによって成立している。これは本来の民主主義政治とは無縁の政治構造だ。

《われわれは、民主主義の中に生きているわけではない。…われわれは寡頭制法治国家のなかに生きているのである。言いかえれば、寡頭制の権力が、人民主義と個人の自由の二重の承認によって制限されている国家のなかに生きているのである。》（『民主主義への憎悪』100）

これは左派にとっては危機的な状況である。つまり、左派にとって民主主義問題そのものが喫緊の課題となっているにも関わらず、この問題へのヘゲモニーを何ら構築できていないということなのである。これまで新自由主義政治の発動が資本主義世界のブルジョア政治形態としてのファシズムから社会民主主義までの広大な領域の一つのポジションとして位置付けられてきたことで、民主主義闘争の可能性と「新しい社会運動」の果たす役割を軽視してきたのではないだろうか。

④ 左派のポピュリズムという提起

ラクラウのヘゲモニー論の要である概念として本書でしばしば用いられるのが、敵対と節合である。敵対とは、社会（ラクラウに言わせれば、社会というものはないのだが）に生まれる様々な紛争や対立のことであり、これは人類が生存する限り生まれるものであって、敵対が無くなる時は政治もなくなる時であるとする。この敵対は、いわゆる従来の階級的な敵対ばかりではなく、様々な差異によって生まれるのであって、当然経済的利害ばかりではなくイデオロギー的なものこそその中心となる。それをアイデンティティと呼び、アイデンティティ相互を結びつけ一つのものに節合させて生まれるのが「空虚なシニフィアン」と名付けられたものであって、それはポピュリズムにおける「人民」概念である。このように諸要求に見られる部分を節合することを「ヘゲモニー」と呼び、左派の政治の主要な任務とするのである。

彼の言う「人民」は、「国民」でもなく、「市民」でもない。ましてや「労働者」でもない。社会の敵対的諸要求を糾合して一つの「名」にまとめ上げたものであり、内容は無いのである。このような無内容な呼びかけこそ、逆に様々な諸要求がそこに自らの姿を見いだすことで運動が構築されていくと言うのである。

つまり、民主主義における民意とか一般意志とかは、それ自体としてはあらかじめ存在せず、これらの節合を通じて構築されるのだ。だから、差異的なシステムが緩く国家を構成している限り、この民主主義は機能していないし、民意も一般意志も存在しないことになる。差異が統合（等価）に向かわなければ、人民は存在せず、ただ法的に固定された国民がいるだけだということになる。

実は、この理論的な枠組みは 20 世紀初頭のファシズム勃興期の社会状況と近似しているように思われる（現在の右派ポピュリズム潮流の社会主義の取り込み）。ラクラウの理論の危うさは、かつてファシズムが台頭してきた時代の中層の不安を表すものとよく似ている。ポピュリズムが右に行くか左に行くかは問われていない。むしろポピュリズムはナショナリズム的傾向を歴史的には示してきた。この不安定性が権威主義的保守と節合することでファシズムへと流れていくことも危惧される。故に、ポピュリズムをヘゲモニー闘争として捉え直し、如何なる運動と節合した人民闘争を作り出すかが問われている。

⑤ ランシエールから

《…デモクラシーとは、最下層民による統治、つまり統治を基礎付けるいかなる資格ももたない人々、つまり名門の出でもなく、財産も社会的威信もなく、特別な学もない人々の逆説的統治、輦轡ものの統治を意味する、アテネの貴族が案出した嘲笑語です。デモスによる統治とは、話すべきでないのに話す人々による統治、統治の資格を一切もたないのに統治する人々の統治です。これは『法律』の第三巻でプラトンが明らかにした事態です。》（『…憎悪』148）

《間違いの概念は、政治の原初的構造に属している。間違いとは、たんに、そのなかで平等を確証することが政治的な形象をとる主体化の様式である。唯一の普遍、つまり平等があるからこそ政治が存在し、平等は間違いという特異な形象をとる。間違いは、分け前なき者の分け前という平等の現前化を社会的な当事者同士の衝突に結びつけることによって、特異な普遍、論争的な普遍を創設するのである。》（『不和あるいは了解なき了解』75）

参考文献：

- ・エルネスト・ラクラウ／ジャンタル・ムフ『民主主義の革命』Hegemony and Socialist Strategy 第二版 2001 年（第一版 1985 年）ちくま学芸文庫 2012 年
- ・E.ラクラウ『現代革命の新たな考察』1990 年 法政大学出版会 2014 年
- ・E.ラクラウ『ポピュリズムの理性』On Populist Reason 2005 年 2018 年 明石書店

- ・ジャック・ランシエール『不和あるいは了解なき了解』1995年 インスクリプト 2005年
- ・ジャック・ランシエール『民主主義への憎悪』2005年 インスクリプト 2008年
- ・ルイ・アルチュセール『マルクスのために』1965年
- ・ルイ・アルチュセール『再生産について』上下原著 1995年 平凡社ライブラリー 2010年
- ・山本圭『不審者のデモクラシー』2016年 岩波書店
- ・保住敏彦『社会民主主義の源流』1992年 世界書院
- ・岩佐茂『主体性論争の批判的検討』1990年 <https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp> 一橋大学機関リポジトリ
- ・山口定『ファシズム』2006年 岩波現代文庫

参考文献：

- ・シャンタル・ムフ『政治的なものの再興』1993年 日本経済評論社 1998年
- ・同 『民主主義の逆説』2000年 以文社 2006年
- ・同 『左派ポピュリズムのために』2018年 明石書店 2019年
- ・バトラー／ラクラウ／ジジェク『偶発性・ヘゲモニー・普遍性』青土社 2002年